

「底が突き抜けた」時代の歩き方 298

カーツという男はどこからやってくるのか - 映画『地獄の黙示録』

有史以来の人間にとって、自分たちがどういう存在であるかを知ることになる最大のショックは、これまで三回あったといわれる。一つは、自分たちが足を下ろしているこの地球という星が、けっして宇宙の中心ではなく、太陽の周りを回る一天体にすぎないこと。もう一つは、人間は特別に選ばれた神の手に届く存在ではなく、サルから進化したヒトという一動物にすぎないこと。更に、人間は自分で気付いているところで存在するよりも、自分が気づかない無意識の広大な野辺で存在していること。フロイドはこう述べており、我々はこのことをすでに知識や情報として知っているが、まだ現実のものとはなっていない。なぜなら、我々は「知ること」の外側にいて、その内側にはいないからである。つまり、我々にとって「知ること」は現実になっていないだけでなく、「知ること」にとっても人間はまだ現実にはなっていないからだ。

したがって、ここで我々にとっての四回目のショックを上乗せしなくてはならない。それは、我々にとっての現実是我々を現実とするなかでしか、やってこないということである。我々がいつもなにかに巻き込まれていることに気づくなかで、我々が自分という秘密をたえずあらわそうとすることにおいてしか、現実は起ち上がってこないといいかえることもできる。我々は現実のなかにある存在だが、現実的な存在であるわけではない。なぜなら、現実のなかにあるからこそ、我々はたえず現実のなかにあることを忘れようとする欲求に駆られているからだ。その欲求は現実のなかにある我々を現実の外に立たしめようとする。つまり、我々は現実のなかにある我々として考え、行動することを回避しようとする。

自分もまた、現実と共に動いている存在であるのに、あたかも現実が自分の回りを動いているかのようにみなす天動説的思考に、我々はたびたび陥っている。あるいは、サルから進化した一動物として自分たちの世界をかたちづくっていることを、我々はしばしば忘れてしまっている。更に、自分の気づかない無意識に出会うためにこそ、自分の入り込んだ現実をもっとも必要としていることにも気づかなくなっている。有史以来の人間にとっての三回のショックをしこたま味わわされる場所が、死と隣り合わせになった戦場であることはいうまでもない。戦場に飛び交う砲弾は自分の気づかない無意識として、自分に弾が当たることはないという天動説的思考を木っ端微塵に打ち砕き、凄惨な一動物としての死を不意に招来するからだ。

戦場に渦巻いている三つのショックを念頭に置いて、映画『地獄の黙示録』が奥深くかかえこんでいる主題に迫っていこうと思う。その主題がウィラード大尉のカーツ大佐

殺しにあることは、今更いうまでもない。

ウィラードが情報部からカーツ殺しを命じられる理由は、カンボジアの特殊任務に赴いていたカーツ大佐が軍隊の規律に背き、ジャングルの奥地で自らの王国を築いて、脱走したアメリカ兵や外国人の傭兵や村民などを従えて私兵集団を組織し、まさに王のように君臨しているという点である。もちろん、カーツが軍務から逸脱して自分の砦を築いているだけなら、カーツを脱走将校として処理するのみで、わざわざウィラードに‘超法規的措置’による抹殺を命じることはなかったにちがいない。問題は、カーツが築いた王国のなかで一体、何が行われているかにあった筈だ。もしそこで平和な千年王国がひっそりと目指されていたなら、それがアメリカの国益の障害にならない以上は、情報部も黙って看過していたかもしれない。しかし、そこで行われていることは平和な千年王国と対極にある光景だった。無用な殺戮が繰り返され、腐乱した死体や切断された生首がゴロゴロと転がる酸鼻きわまる王国が、そこには出現していた。

だから情報部は秘密裡に、ウィラードにカーツ殺しを命じたのだ。カーツにこれ以上の無意味な殺戮を繰り返させないために、彼の地獄の王国を瓦解させるために。ベトナムで地獄の戦争を遂行しているアメリカが、ベトナム戦争とかかわりのない地域で繰り返されているカーツの蛮行に心を痛めて、中止させようとしているのだろうか。遠くの虐殺に黙って見ていられぬほどの慈愛と善意に包み込まれた平和な国なのであろうか、アメリカは。もちろん、カーツ以上の何千倍もの規模でベトナム人民に対する虐殺を日々行っているアメリカが本来的には、カーツの乱行を気に留める筈がなかった。だが、アメリカは無視できなかった。ベトナムでアメリカは一体、どのような汚れた戦争を行っているのか、を逐一報道しているジャーナリズムに、元グリーンベレー将校が任務を逸脱して、牙城で殺戮が繰り返されていることを知られたくなかったのだ。

どうして知られたくなかったのか。共産主義国家の侵略を阻止するという大義を掲げて、ベトナム戦争に本格的に介入しているアメリカが行っていることは、もしその大義を外すなら、カーツの王国で繰り返されていることと本質的に変わらなかったからである。その大義故にアメリカはカーツの行為を非難することができるけれども、大義の欺瞞を見抜くカーツは、同じ殺戮行為であるのに、大義を掲げていれば聖戦の如く扱われ、大義を掲げなければ非道な蛮行とみなされる欺瞞ともたたかっていたのだ。おそらく戦場に何度も足を踏み入れて敵とたたかってきたカーツが自らに下した結論は、戦場では理念や大義などは糞食らえであって、ただひたすら敵と殺し殺されあうだけであつた。理念や大義は敵を殺すときの、あるいは敵を殺したときの言い訳を粉飾する欺瞞的な装置にすぎなかった。いくら美辞麗句で理念や大義を飾り立てようとも、戦場で人を殺すことには全く変わりはない。

カーツの地獄の王国がマスコミに知られたくなかった以上に、アメリカが彼の振舞いを根本的に許せない理由があつた。それはカーツが戦争の欺瞞と戦いながら、個人で戦争を行っているという点であつた。国益を第一に国家組織として戦争を行っているアメ

リカとすれば、その国家組織から離脱して個人としての戦争を行っているカーツの考えや行動そのものが根本的に許されなかった。ベトナム戦争はアメリカにとっては、ソ連や中国の後押しを受けた北ベトナム共産主義国家との戦争にほかならなかった。ところが、直接的な交戦はないものの、この国家対国家の戦争というありかたに挑むように、カーツはこの欺瞞的な戦争を否定して、自らの王国を築き、個人としての欺瞞なき戦争を行使しだしたのである。国家対国家間の戦争の図式に歯向かっているカーツの行動を、国家対国家間の戦争を担う軍人としてカーツを育成してきたアメリカは、到底許すことはできなかった。

カーツ殺しの命を受けたウィラードは、単に与えられた任務を思考停止状態で遂行するような機械的な軍人ではない。もしそのような軍人であったなら、ウィラードもカーツ殺しを命じられた前任者と同様に、カーツに逆に殺されたことは間違いない。カーツが待ち望んでいた暗殺者は、軍当局に忠実で従順な、要するに、任務以外に自分を殺す理由をもたないような人物ではなかったからだ。映画が始まるためには、観客の誰もが抱くに違いない疑問に沿って、その疑問をしだいに解き明かしてくれる主要な人物が登場しなくてはならなかった。カーツ大佐はなぜ軍中央に反抗したのか。カンボジア奥地に自らの王国を築いたのはなぜか。そして王国を維持するために、どうして生首ゴロゴロの凶々しい光景を頻出させることになったのか。カーツ殺しの任務を受けたウィラードは当然のようにして、自分が殺そうとする男の辿った風景を追っていく。

ウィラードが最初に戦場で出会う光景は、攻撃機で森を焼き払ったあと、朝のナパームの香りが好きだ、勝利の香りだ、と言い放つキルゴア中佐の軍団である。この男は空からワグナーをガンガン鳴り響かせながら、漁村を急襲し、また敵の銃弾が飛び交う戦闘の最中に海辺でのサーフィンを楽しんでいるような、イカれた人物である。ここでウィラードが、「キルゴアがやっていることが許されるなら、なぜカーツがやっていることは許されないのか」と呟く。キルゴアはベトナムの村を手当たりしだいにナパーム弾で焼き払う一方で、村民の子供たちの命を懸命に救ったりする異常さを発揮するが、自分たちが逃げまどう村民たちを攻撃しておきながら、重傷を負ったベトナム人女性を病院に兵士たちが運ぼうとする場面に遭遇して、ウィラードはその女性を容赦なく射殺する。「機関銃を浴びせかけたあとにバンドエイドを貼ってやって何になる。欺瞞はもうたくさんだ。カーツの気持ちが少しわかってきたような気がする」というウィラードのモノローグ。

「カーツの気持ちが少しわかってきたような気がする」どころではなく、手負いのベトナム人女性を射殺するウィラードの無慈悲さは、女性を救おうとする兵士たちの欺瞞をこそ射殺する点で、カーツそのものであった。戦争の欺瞞を憎むことで欺瞞の余地なく果断に殺戮を行ってみせなくてはならないという立場こそ、カーツの発想であったからだ。キルゴアの異常さに出会い、戦場における兵士たちの欺瞞的な行動に足を踏み入れたとき、ウィラードは任務として命じられたカーツ殺しの旅に、自分自身にとっての理

由が大きく迫り出してくることで、いよいよカーツの王国へと近づきつつあったのである。

では、ウィラードの一行がプレイメイトたちの慰問団に出くわすシーンは、ウィラードがカーツ殺しの旅に接近するどのような欺瞞を露呈しているのだろうか。スージーQの曲に合わせてヘリから次々に仮設の巨大な舞台に下りてくる姿態も露わなプレイメイトたちの、ストリッパーのように腰をくねらせる挑発的な踊りと、彼女たちにむしゃぶりつかんばかりに舞台に殺到する興奮した兵士たち、そして危険を感じた彼女たちを大急ぎでヘリに乗せて脱出させようとする大混乱とコンサートの中止といった一連の事態は、戦争の欺瞞よりも戦場の大きな空虚さといったものを感じさせて止まない。その空虚さは、脱出した筈のプレイメイトたちのヘリコプターが事故のためにジャングルの中に取り残され、燃料と引き換えにウィラードの一行の乗組員とセックスをする場面に至って、一挙に浮き彫りにされる。戦場に放り込まれてしまった男も女も、`こんな筈じゃなかった`という気持ちをたっぷりと味わわれ、一生消えない傷痕を刻み込まれて浮遊せざるをえなくなっていくのだ。

カーツがT・S・エリオットの詩『空ろな人々』を朗読するシーンがある。

私達は空ろな人間。私達は詰め物をされた人間。

互いに凭れあいながら、頭には藁が詰っている。おお！

私達が互いに囁くとき、それは静かで意味がない。

枯草をわたる風のように。

乾いた地下倉庫のなかで、壊れたガラスの上を走る鼠の足のように。

輪郭のない形。色のない影。麻痺した力。動きのない身振り

カーツがこの詩を朗読するということは、自分もまた、「空ろな人間」、「詰め物をされた人間」、「互いに凭れあいながら、頭には藁が詰っている」人間の一人であることを自覚していることを物語っている。戦争は、自分たち一人一人が「空ろな人間」であることを一挙に照らし出す。この空虚さに耐えられなくなって、我々は殺し殺されあう戦場へと赴くが、そこで生き残った我々が味わうのは、更なる空虚の深まりにほかならない。

「輪郭のない形。色のない影。麻痺した力。動きのない身振り」、発されることのない言葉といったさまざまな空騒ぎが、どんよりとした死の予感に魅入られている空虚さ。カーツがこのエリオットの詩を朗読したとき、生きることの空虚さで満たされている戦場での殺戮に終止符が打たれることの願いが、そこに託されていたことは間違いない。

欺瞞への反撥と空虚への忍耐を深めながら、カーツが潜む奥地へと突き進むウィラードの一行に対しても、戦争の恐怖と狂気はたえず襲いかかり、無用な機銃掃射の跳ね返りを喰らって仲間が命を落としていく中で、フランス人入植者が作り上げた巨大な植民農園に遭遇する。ここで家長から浴びせられる次の言葉が、カーツの居場所に漸く辿り

着こうとするウィラードにとって、決定的な意味を持った筈だ。「私たちは、なぜここに留まっているのだろうか？ それは、私たち家族を一つにまとめておくためだ。私たちは、私たちが持っているものを守るために戦っている。しかし、君たちアメリカ人は、大いなる幻想、実態のないもののために戦っているんだよ」

この言葉がベトナムで惹き起こしているアメリカの戦争に向かっていたら、その戦争の欺瞞に反撥して、私兵を組織して殺戮を繰り返しているカーツの王国にも向かっていた。いや、それに留まらない。そのようなアメリカ軍の情報部からカーツ殺しを命じられているウィラード自身に、なによりも向かっていた。ウィラードよ、お前は、「大いなる幻想、実態のないもののために戦っている」カーツを、一体、幻想でもなく、「実態のない」かたちでもなく、どのようにして殺しうるとするのか、という問いであった。つまり、カーツ殺しを命じられたお前自身が、どれほどの実態を持って、この「実態のない戦争にかかわっているのか、ということであった。この問いにまで下降すると、農園の家長から発された言葉が、ウィラードがやがて向かい合うことになるカーツ自身から投げかけられる、お前は本当に私を殺して、「大いなる幻想、実態のないもののために戦っている」空虚さに終止符を打つことができるのか、という問いをすでに含んでいることに気づく。

このフランス植民農園もまた、ジャングルの奥地に築かれた私兵集団の王国にほかならないことを考えると、この王国の陰画的な位置にカーツの王国があることがわかる。要するに、ウィラードがカーツの王国に踏み入る直前に出会ったフランス植民農園とは、生の淵にとどまっているカーツ王国であったとみなせなくはない。アメリカはベトナムで一体、誰のために何のために戦っているのか？ という問いは、アメリカと同様、この問いからすでに遠くかけ離れてしまっているが故に、カーツは殺され、無意味な殺戮は中止されなくてはならない、という確信をウィラードに芽生えさせたと思われる。死者は死者をして葬らしめよ。その農園で一族の美しい未亡人と一夜のベットを共にするシーンは、カーツが佇む死の淵に対峙することになるウィラードのエロスに満ちた生の甘美な感覚をあらわしていた筈だ。

カーツは自分の空虚の深さをなによりも自覚していたが故に、もはや殺戮以外に何も生みだすことのない自分の空虚に終止符を打ってくれる人物が王国の外から現れるのを待ち望んでいた。王国に足を踏み入れたウィラードが捕らわれて、直ちに殺されずに金属製の檻に閉じ込められたのは、カーツにとってウィラードが待ち望んでいた人物かどうかを確かめるためであった。自分を殺す人物は自分をもっとも正しく理解してくれる人物でなければならないというのが、カーツの考えであった。そうでなければ、自分を殺す人物が自分にとって代わることになるだけであり、本当の意味で自分が殺されて終止符を打たれることにはならなかったからだ。

「我々は、ベトナムの傷ついた子供たちに注射をした。そうしたら、母親がアメリカ人がよかれと想着て注射したその子供の腕を、切り落としたんだ」と、30年後のアフガ

ン爆撃でみられた、爆弾と同時に食糧や医薬品を投下するような、そして食糧を拾いに行く子供たちが地雷で死んでしまうような戦争の欺瞞について、カーツはウィラードに話す。また、太陽の下で子供たちに囲まれたカーツが、ウィラードにアメリカのマスコミが書き散らしている嘘の記事を読み聞かせるシーンもある。「その男は大統領に先週、こう報告した。`事態は改善されています。あの土地は、いい感じになってきています`とな」。カーツはウィラードの反応を窺うように聞く。「そいつらは、おまえにとって、どんな感じがする、ソルジャー？」お前はこんな戦争の嘘に耐えられるかということだ。

カーツが殺される直前にテーブルに吹き込んでいたのは、「奴らは私を人殺しと呼んでいる。人殺しが人殺しを責める？ 欺瞞だ」という冒頭の言葉であり、「彼らは少年たちに村を人を焼き払えと教える。しかし、その反面、飛行機の中では`ファック`という言葉を使うなと教えるんだ」というものである。ここで、カーツは自分の見てきた戦争の嘘を語り、その嘘を憎悪する中から嘘を一切排した人殺しとして自分をあらわそうとしたのだ。だがカーツは嘘のない殺戮を繰り返す中で、嘘を吐くことが問題なのではなく、嘘をどうしても人間に吐かせてしまう殺戮が問題であることに気づき始めたのである。人殺しという最悪の事態に耐えられない感覚が、自分を欺く嘘を紡ぎだそうとするのだ。したがって嘘を憎悪するカーツが行ったことは、嘘で自分をごまかさないというだけのことであって、人殺しに無感覚になっているわけではなかった。自分に嘘を吐かない分だけ、なにも生みださない無意味な殺戮行為の繰り返しになって、カーツは無限に見開いている巨大な空虚の穴の中にますます突き落とされていくのである。

もしカーツが嘘で自らをごまかさない戦闘を自らに課しながら、誰のために何のために戦うのかという問いがみえなくなる中での空虚さを一身に浴び、しかも殺戮が自らの空虚さを埋める術ではありえないことを十分知り抜いている人物であったなら、彼が自らの陥っている窮地を脱するにはもはや彼の死以外にありえなかった。生きて脱することは彼が殺戮した多くの死者たちからすれば、欺瞞そのものにほかならなかったからだ。どこまでも欺瞞を避けるならば、彼は自らの死を受け入れるほかならなかった。しかし、殺戮を繰り返してきた彼にとって自死もまた、欺瞞であるが故に禁じられていた。すると、唯一残されているのは彼がそうしてきたように、自らが殺戮されることだけであった。自分を殺戮する者はその殺戮によって、欺瞞にも空虚にも陥ることのない途を歩む者でなければ、自分は殺戮されたことにはならないという考えが、この生首ゴロゴロの王国に君臨するカーツの中にしっかりと芽生えていたのである。

はたしてウィラードは、カーツが待ち望む者であったか。カーツは無抵抗のまま、ウィラードが振り下ろした斧によって殺される。カーツを殺して部屋から出てきたウィラードは階段の上に立って、広場に集まっているカーツの部下たちを見下ろし、カーツを殺した斧を床に置くと、カーツの部下たちも自分の武器を捨てる。ウィラードはそのまま階段を下りて、カーツの部下たちの中にいる、自分と行動を共にした唯一の生き残りの若者ランスを見つけ、彼を連れてボートに乗り込み、河を下って行く。これが映画の

ラストシーンである。彼らがもと来たサイゴンへ帰っていったのかどうかはわからない。ウィラードがカーツの後継者であることを否定するために、彼を殺した武器を捨てて彼の王国を去ろうとしたことに、すべてがあらわされていたのである。

ところで、戦争の中の欺瞞を憎悪しながら、空虚に彩られた殺戮を繰り返すカーツの狂気を支配していたのは、何であったか。最後の死に際にカーツは、「恐怖だ、地獄の恐怖だ」という一言を発する。その一言によってカーツもまた、戦場に駆り出された兵士と同様、「地獄の恐怖」をさ迷っていた`The Hollow Men`（空ろな人間）にほかならなかったことが、鮮明に浮かび上がってくる。恐怖を表す horror という英語は、嫌悪という意味も別に持っており、辞書を引くと、`the horror of war` が「戦争の惨事」であることもわかる。コッポラ監督が尊敬し、その影響を多大に受けていたといわれる黒澤明監督が、最初のオリジナル版に寄せた次のコメントが、「地獄の恐怖」に触れている。

「面白い。それは、これまでの映画の表現を数歩踏み越えた、勇猛でエネルギッシュな表現が掴んでみせた面白さだ。この映画は難解ではない。変に理屈っぽく見るから、そう思うのだ。恐怖は、人間を支配し、異常な状態に追い込む。

戦場で人間が、異常に勇敢になるのも、残虐になるのも、また奇妙な事に熱中するのも、すべて恐怖から逃避するためだ。恐怖から逃れるためには、人間は何を考え何をするかわからない。時に地獄が天国に見えるから怖いのだ。

そう云う人間と云うものが怖いのだ。」（『キネマ旬報』02年1月下旬号より）

殺し殺されあう戦場の恐怖は、一度味わった者でないと本当にはわからないと思う。いくら想像力を駆使したところで、そこに身を置いたことがなければ、想像すること自体が不可能であろう。「地獄の恐怖」とは、地獄の狂気にほかならない。戦争自体が人間の理性なるものを吹っ飛ばしてしまっているなら、戦争という極限状況で横行するのは人間の狂気であり、映画ではキルゴア中佐やカーツ大佐の狂気に象徴されている。だが同様に、戦場に踏み込んでいるウィラード大尉の狂気はどのように示されているのだろうか。カーツ殺しを決行することのなかに、ウィラードの狂気は潜んでいるのだろうか。生首ゴロゴロの異様な王国に足を踏み入れたウィラードがたとえ歴戦の兵士であったとしても、恐怖に足が竦まなかった筈がない。また、カーツに対面した彼が殺される恐怖を味わわなかった筈がない。程度の差はあれ、同じ戦場の恐怖と狂気に包み込まれているウィラードは、ただ殺し殺される関係以外にありえない戦場の中で、カーツを殺しただけのことであり、自らの行為に終止符を打つことを切望していたカーツが、ウィラードを誤解することを望んで、無抵抗に自らの首を差し出ただけのことかもしれないのである。ウィラードがカーツ殺しの使命以外のどこからやってくるのかは、そんなにはっきりしているわけではないのだから。

2002年4月24日記

